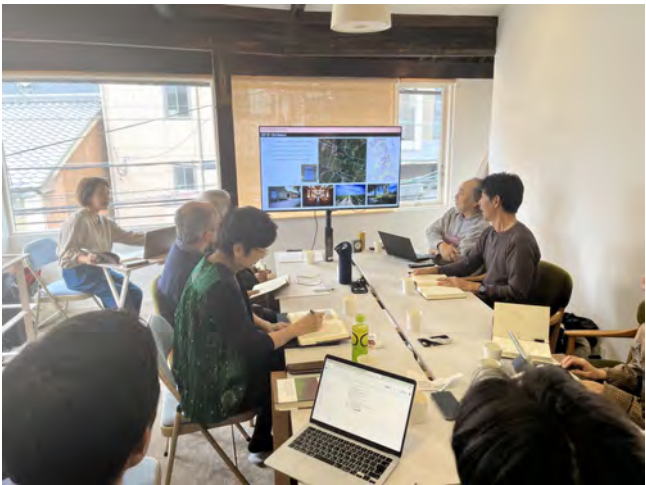


2023年11月11日(土)14時より、六録楼(京都市東山区)にて、『テロワール—ワインと茶をめぐる歴史・空間・流通—』(編者・赤松加寿江／中川理、昭和堂、2023年)(以下、本書)の書評会が開催された。

本書評会は、「テロワールによって捉える土地と文化の新たな領域史の構築」をテーマに実施された学際的な研究成果である本書の位置づけと今後のテロワール研究の展望について考察するものである。第1部では、まず本書の研究成果を振り返り、日本造園史を専門とする丸山宏氏、フランス建築史を専門とする松本裕氏より本書に対する書評をいただいた。その後、書評者2名と共著者とともに学術的な側面から本書の位置づけと研究の発展性が議論された。第2部ではジャワ島西部のコーヒー生産に着目した三谷美琴氏による研究発表が行われ、今後のテロワール概念の発展と展開可能性を探った。本摘録では書評会において展開された議論の要点を簡単に紹介する。



〈実施概要〉
日時：2023年11月11日(土)14:00～17:00
14:00～ 第1部：書評会
16:00～ 第2部：研究発表 発表者：三谷美琴(京都工芸繊維大学・建築4年生)
「植民地期ジャワ島西部におけるコーヒー生産の領域史に関する研究—流通形態からみる空間構造の変化—」

場所：六録楼(京都市)
参加者：丸山宏(日本造園史)、松本裕(フランス建築史)
杉浦未樹(オランダ経済史)、坂野正則(近世フランス史)、
大田省一(アジア都市史)、中川理(日本近代都市史)、
赤松加寿江(イタリア都市史)

第1部では、1.テロワールの概念の整理、2.土地と空間を分析する手法としてのテロワールの可能性、3.テロワールにおける都市の役割について、議論が交わされた。

1. テロワールの概念 大きいテロワールと小さいテロワール

まず、本書で示した2つのテロワール概念に関して整理が行われた。従来、「テロワール産品」という用語は地域と結びつき、希少性の高い付加価値産品として用いられ、地域に豊かな価値と意味を加えるものとして存在していた。しかし近代以降、地理的表示制度が拡大し、それがあらゆる地域産品に反映されたことで、テロワールという言葉の濫用が導かれてきた。

本来的な意味でのテロワールとは、自然環境と人的環境の相互作用により生み出された地理的・文化的領域であり、畑区画にあたる小さなテロワールから、産品を作り

出す原産地、加工地、集散地、流通域、文化圏に広がる大きなテロワールまで、視野に応じて捉える領域が変容する。この概念を適応すれば、ワインにおけるアッサンブラージュ(複数品種のブレンド)のように土地との繋がりが表れにくいような産品に対しても、テロワールという視点からは分析を行うことが可能となる。

書評会ではテロワール概念を改めて整理する中で、本書の意義が指摘された。それは「農村と都市」・「生産と消費」という二項対立的な枠組みを、テロワールというフィルターを通して、環境や社会、文化を、産品をめぐる循環構造として捉え直した点にあり、土地と空間の関係性を繙くうえで重要な成果である。

(八木橋 京)

2. 土地と空間を分析する手法としての テロワール

丸山氏は土地と空間を分析する手法としてテロワール研究の可能性があることを示唆した。土地と空間にアプローチする概念は、これまでも多くの議論が重ねられてきた。古いものでは気候や地形も含めた概念である「風土」や鈴木博之が提示した「ゲニウス・ロキ」(=地霊)^{*1)}などがその例として挙げられる。ただし、これまで示されてきた概念では一つの土地から歴史を紡ぎ、都市空間を解釈することはできたとしても、気温や土壌、土質にまでアプローチすることは難しかったという。

それに対して、本書で示されたテロワール概念は、農業がキーワードとなり、土壌への注目度が高い。さらに、上からの目線ではなく、土地とそこで行われる人間の活動の蓄積を対象とするやり方で空間を分析していることは評価すべき点であり、自然と人間の相互関係を含めて空間を解釈する手法としてテロワール概念が非常に有効であることが指摘された。

また、赤松氏はテロワールという言葉はフランス語ではあるが、土地ごとに「固有の味がある」という感覚は、各所で確認できていることを説明した。今後、テロワール研究が展開することで、産品だけでなく農地や生産地への評価につながっていくことが期待できるのではないかと論じた。

^{*1)} 鈴木博之『東京の地霊—ゲニウス・ロキ—』(文藝春秋、1990年)
(和田 路)



3. テロワールにおける都市の役割

テロワールの構成要素の一つである人的環境は、ワインの典型性の抽出や評価に大きく関わってくる。特にワインにおいては、都市側の評価が大きく関わり、これらの要素は本書でも重要視されている。その部分では以下のように要約することができる^{*2)}。

ワインの評価や消費文化のあり方は都市、マーケット側から生産者側にフィードバックされ、進化し、付加価値を獲得していくような循環構造の中で築きあげられてきた。典型性は評価を受けていくなかで繰り返し出現する官能的特徴であり、消費文化の宿る都市でこそ見出される。

テロワールにおける都市側の役割が考察される中で、ワインが他の産品とは異なる性格をもっていることが指摘された。ワインは消費文化の中で嗜好品として扱われるが、それは単なる味への評価に止まらず、ワインの生産地におけるアイデンティティの創出をも招いているという。ワインテロワールにおいて都市はそのワインの固有性を作り上げるうえで必要不可欠な要素である。

テロワールの分析手法により消費地と生産地の構造をみていくことで、都市と農村が評価する側とされる側という相克の関係にあることが改めて認識された。

^{*2)} 編者・赤松加寿江、中川理『テロワール—ワインと茶をめぐる歴史・空間・流通—』(昭和堂、2023年) pp.7-10

(佐木 悠真)

第2部ではインドネシア西ジャワ州におけるコーヒーテロワールの研究発表と第1部を経て、テロワール研究が今後どのように展開されていくべきかに関して議論が行われた。

4. テロワールの概念を どのように展開させていくか

コーヒーでテロワール研究を展開する

三谷氏はインドネシア西ジャワ州におけるコーヒー生産の調査を通じて、同地域におけるコーヒー生産が複数の国々の介入の歴史の中で継続されてきたことを指摘した。そこでは、自然条件に加え、社会構造が変化し、農園形態が「集落付近の小規模な農園」から「山麓の大農園」へと変化することにともない、コーヒー生産が火山の中腹での生産から集散都市を核とする「生産地—加工地—集散地」への空間構造の変容に寄与してきたという。三谷氏の研究成果から、テロワール概念をコーヒー生産に適用することで、宗主国—植民地の枠組みだけではみえてこなかった、社会=空間構造の実態を読み取ることができるのではないかと発展性が示唆された。

他の産品への応用

本書ではアジアの「茶」に適用し、テロワールの概念を豊富化、深化することが試みられ、三谷氏の研究成果と合わせて、テロワール研究が他の産品に応用できることやテロワール概念の適用によって農村と都市の新たな空間構造を読み取ることができるとい、テロワール研究の発展性を見いだすことができた。ただし、テロワール概念を他の産品に導入した際に、どのような読み方ができるのかについては産品ごとに検討する必要があることが今後の課題として挙げられ、テロワール概念の適応には「人による加工プロセスを経ることで付加価値がついた嗜好性の高い産品」であることが条件だと赤松氏により示唆された。

テロワール概念の展開

松本氏はテロワール研究の展開において

「人間と自然の相互作用をどのように捉え、それが都市を考える上でどのような知見をもたらすのか」が重要な点であると説明した。これからの都市や建築を考えるうえでは、環境や自然がキーワードとなり、大地や土地といった人間の範疇を越えた恵みと、その相互作用を考える必要があるという。具体的な土壌に着目して知見を得ることができるテロワールという新しい考え方は、まちや建築を考えていく際にも普及していく可能性が高いと論じた。また、今後のテロワール概念の展開を考えると、テロワール概念の変遷を丁寧に捉えた本書は重要な意義をもつことを指摘した。

本書で示された成果から何を学ぶことができ、未来のまちづくりにおいてどのように生かすことができるのかについては、建築や都市を担う人々がそれぞれ考えるべき課題であることも提示された。

テロワールという言葉

市場原理の中で消費しないために
書評会の終盤では「テロワール」という言葉の使用について議論が行われた。

近年、市場において利用されているテロワールという言葉は「その土地ならではの」といった、地域独自の価値を強調するために使われている。ここでのテロワールは商品や観光産業を盛り上げるうえで利用されている側面があり、消費的でテロワールの本来的な意味とは全くかけ離れていることに注意する必要がある。

今後の研究においては、テロワールという言葉の本質、すなわち、土地と人間の関係やその対話を捉えることが重要になる。消費活動を刺激するために利用されるテロワールという言葉は否定されるものではないが、テロワールという言葉が安易に市場原理の中で消費されないためには、その本質を捉え、適切に用いることが求められる。

(三谷 美琴)

(誌面デザイン：楡皮拓也)